

梅鶯仏教壮年会報

第120号
2014年
10月26日

報恩講

〔法輪寺報恩講
と併修〕

十一月二十二日（土）

昨年度より、法輪寺報恩講
と併修させて頂いておりま

「日本人ってやっぱり素晴らしい①」

田中 薫（坂田組仏社会長）

今年の夏、長野住職、私の同級生、従兄
そして私の計4名で立山登山に行ってきた。
忙しい日々はどなたも一緒ですが、「忙
中閑在り」の諺もありますように、4人と
もに忙しい間をぬいながら、8月3日から
5日まで2泊3日の登山でした。
その登山を題材に、今般久しぶりに長野
住職より梅鶯仏社会報への寄稿依頼を受け

ました。月会報に予定でいい9
ただ、今年度、し
たが、今年度、し
図らずも宇賀野
区長の重責を賜
り、予想以上に
いろいろな事に
遭遇し、延び延
びになつてしま
本格的な登山を始めたのは最近
になつてからですが、立山連峰も
火山地帯であり、この度の御嶽山
の悲しい出来事を耳にしますと、
他人事ではないような気がいたし
ます。まずは災害に遭われた多く
の皆様に謹んで哀悼の意を表させ
て頂きます。
さて、立山は北アルプスにある
3000mを超す本格的な山岳で
す。登山計画は登山経験豊富な私の
従兄に立ててもらい、事前準備と
して、霊仙山にも2度ばかり訓練
登山しました。
登山の始終を書きますと紙面が
足りませんので、今回はカットさ
せていただきますが、登山とは別
に実に感動的な出来事がありまし
たので、ぜひ聞いて頂きたいと思
います。
私たちは立山登山から無事下山



し、立山駅からかなり離れた駐車
場で歩きました。
最終的には雨に降られたので、駐
車場でまずは着替えをして、すっ
きりとした気分での帰途につまし
た。
5日はたまたま長浜の大火火大
会でしたので、帰る早々、登山の
反省会を兼ねて「いっぱい」と
「花火見物」をするべく家路を急
ぎました。
立山のように高い山に登ると、
どういふ分けか、携帯電話のバッ
テリーがとても速く消耗してしま
い、ベテランの従兄以外の携帯電
話はすべてアウト状態。
自宅に帰ってすぐに携帯電話を
充電しようと思いましたが、携帯
を入れているポーチが見つかりま
せん。ポーチには携帯電話やカメ
ラ、ヘッドライトなどを入ってい
ました。
つい急いでいたので、着替えし
たときにポーチを
駐車場の地べたに
置き忘れていたの
です。
遠い地の地べた
に忘れたポーチ。
殆どあきらめたの
ですが・・・。
次号につづく



題材法話

浄土真宗のみ教え② 「人生そのものの問い」

＊拝読本をお読み下さい。

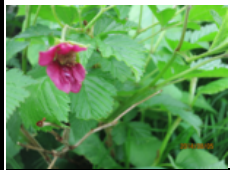
「生老病死」を代表とする人生の苦の原因は、「生老病死」そのものにあるのでなく、この私自身の受け止め方にありました。○**仏教・浄土真宗の救い**では仏教は、その苦をどのように解決しようとするのでしょうか。仏教は、お釈迦様が私たちの苦しみを根本的に解決することを示された教えです。つまり私たちの苦しみの原因は煩惱であり、煩惱を滅した状態が「さと」といわれます。すべてのものをあきらめ、安楽の世界にすることができます。そしてその煩惱を滅する実践が、八正道などの仏道修行で、修行することにより悟りを開こうとするのが聖道門と呼ばれる自力行の世界です。親鸞聖人も比叡



山の20年間は、ひたすらこの「自力行」によってさとりの世界を得ようとなされ、しかしながら、自ら煩惱を滅することなどはできない自分にと達され、失意の中であら、自ら修行によつて煩惱を滅することが求められていた。法が私には、すてに救いたことに気が付かされ、南無阿弥陀仏の世界へと入られたのです。阿彌陀如来によつて救いはたらきによつて、この世の命を終える時には必ず浄土に生まれ、悟りを得ることになる。本願の救いに出会えば、人生の悲しみや苦しみはなくなり、はしませんが、その中にあつても「必ずお浄土に生まれ、仏と成ることができる」という安心の世界が開け、苦しみがくしか「なかつた人生の中」で「確かな答え」



が与えられるのです。○**お念仏の世界**作家の五木寛之さんは、自著の中で、「宗教とは、闇夜（やみよ）の慣れない危険な道を歩く不安を解消してくるわけでもなく、代わりになる重い荷物を持つてくれる、けでも苦しい距離を縮めてくれる、な、苦しみと重さとは不安のなかで、歩くエネルギーを与える、あるいは『目に見えない人間の不安という支えをしてくれる』ような光となるものだ」と言われている。一般的に宗教と言え、人生の苦しみを除き、願いを叶えてくれるもの、考えられがちなのですが、本来の宗教というものは、人生の苦しみをや不安をそのまゝに受け止める中で、「生きる勇気」や「生きる支え」を与えてくれるものです。という、仏教は、人間の苦しみを短絡的に「無くす、取り除く」



などというのではなく、その原因を見極め、根本から解決させようとするものなのです。○**大悲無倦常照我**私達の人生を根底から支えて下さっているのが阿彌陀如来であり、私達が忘れていようと、阿彌陀如来の方は常に私達を憐れみ見捨てずに灯火をかがけて下さっているのです。悲しみにくれ、苦しみにもたえる気持ちを、常に下さつたかくつみこんで下さつて、苦難に沈んでいる時にこそ、阿彌陀さまは「われにまかせよ」と力強く、そしてやさしく呼びかけて下さっているのです。その大いなる心に出会うことで、私たちは生かされていくのです。そこ「人生そのものの問い」に確かな答えが与えられ、確かな人生を歩むことができるのでしよう。5・7月例会住職法話より